

2020年6月23日

戦後75年、司教団メッセージについて

教区司教 松浦悟郎

戦後75年にあたる今年、日本カトリック司教団は「すべてのいのちを守るため—平和は希望の道のり—」と題する平和メッセージを発表しました。毎年、8月の平和旬間に向けて会長談話が発表されますが、今年は6月23日沖縄慰霊の日に合わせて、司教団として全員で沖縄に行き(あいにく、新型コロナウイルスの問題で沖縄に集うことができませんでした)、そこでメッセージを発表することになりました。

このような特別な形でメッセージを発表するのは、今年が戦後75年であること、また国際連合創設75年、日本の植民地政策と深く関係する朝鮮戦争開始70年、そして昨年(2019年)の教皇フランシスコの訪日に応えるという意味があります。

歴代の教皇は、国連の役割の重要性を常に強調してきました。しかし、近年、自国中心主義の台頭とともに、これまで世界をつないできた「人権と平和」という共通の価値観が壊れつつあり、また、米中の新たな冷戦の始まりは、これからの世界の在り方に影を落としています。

このような状況の中で、日本がどのような立場と役割を果たしていくかはとても重要なことです。特に、緊張状態にある東北アジアの中で、「戦力を持たず、戦争しない」と誓った日本が、その方向を保つか変更するかで大きな影響があります。しかし、残念ながら、過去の過ちと真摯に向き合っていない日本は今、再び「戦争できる国へ」と舵を切ろうとしています。沖縄については、戦争の痛みを顧みることなく、戦前から一貫して戦争遂行のための軍事利用、さらに基地建設を続けています。

訪日した教皇は、「軍備拡張競争は、……貴重な資源の無駄遣いです。……武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは途方もないテロ行為です」と語り、また核兵器については、「持つこと自体が倫理に反する」と明確に否定しました。

戦後75年を迎えた私たちは、悲劇的な戦争の体験を持ち、今もなお基地の苦しみの中にある沖縄の人々に連帯しながら、共に「ヌチドウ宝(いのちはたから)」の思いで、心から平和を願い、祈り、行動しましょう。